

ヨーロッパ南アジア学会から研究の現在を考える

著者	菅野 美佐子
雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	24-24
発行年	2019-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009409

ヨーロッパ南アジア学会から 研究の現在を考える

2018年7月24日から4日間、ヨーロッパ南アジア学会(the European Association for South Asian Studies)が主催する「第25回ヨーロッパ南アジア研究大会」がパリ高等社会科学研究院・南アジア研究センターで開催された。1950年代半ばに人類学者のレイ・デュモンによって設立された同センターは、南アジア研究としてはフランス最大の研究機関である。大会では56の分科会において500名以上の発表者が集い、各パネルセッションで熱い議論が交わされた。

なかでも目を引いたのは「ヒンドゥー」や「インド国家」をめぐる、中心化されるものと周縁化されるものに眼差した研究報告である。インドでは2014年にヒンドゥー至上主義を掲げるインド人民党が総選挙で勝利し、同党所属のナレンドラ・モディが首相に就任して以降、ヒンドゥー・ナショナリズムの動きが活発になっている。この影響からか、本大会でも基調講演や多数のパネルのなかで、ヒンドゥー・ナショナリズムをめぐる動向や、ヒンドゥー中心主義によって周縁化される少数民族(アディワシー)や下位カースト(ダリト)、女性、ムスリムといった社会的マイノリティにかかわるイデオロギーやアイデンティティが、歴史、政治、社会、芸術など種々の観点から議論された。ここでは、2つの基調講演から、研究視点としての「ナショナリズム」や「ヒンドゥー至上主義」を浮かび上がらせたい。

表象世界にみるナショナリズム

初日の講演では、歴史学者のスマティ・ラーマスワミが、インド独立の父、ガンディーが美術作品にどのように表象され、メタレベルで国家のアイデンティティやイデオロギーといかに結びついているのかを紐解いた。たとえば、腰巻一枚を纏った上半身裸のガンディーを描いた数々の作品において、当時の白人入植者が厭悪した茶褐色の肌の色や、英国への抗議行動として繰り返した断食による細身で無駄のない肉体が、支配への抵抗やインド人の高潔な精神性のメタファーとして描かれていることが説明される。また、ガンディーが英国政府による塩の専売への抗議として行った「塩の行進」を題材に、長距離の歩行に耐えた彼の強靱な足や杖、恐れを取り除き平安を導く印相を示す手などを力強く描いた絵画が、歩くこと



S.ラーマスワミの講演の様子。ガンディーの「歩行」を題材にした作品が紹介される(2018年7月24日)。

を抵抗の武器とし、支配者に屈することなく民衆を国家建設へと導いたガンディーの「歩行政治」を称揚するナショナリスティックな作品として紹介された。

だが、世に公開された作品は、その後、作家の意図がどうであれ、いかなる解釈も利用もされる。ラーマスワミは、最後にモディ首相と中国の習近平国家首席が、ガンディーの国産品愛用運動の象徴である糸車スワデーシの前で対談する写真を提示し、政治的イコノグラフィーとしてのガンディーの表象の在り方が、今日のインドにおいて今後どのように読み替えられていくのかを示唆して講演を締めくくった。

インド的デモクラシーへの視座

もう1つの基調講演では、政治学者のクリストフ・ジェフレロットが「エスニック・デモクラシーへと向かうインド」と題して、ヒンドゥー至上主義者によるムスリム・コミュニティへの攻撃に批判的に切り込んだ。演題にもある「エスニック・デモクラシー」は社会学者のサミー・スーハが提唱した概念であり、多民族国家においてマイノリティは一定の集合的権利を享受できるが、国家を支配するのはマジョリティであり、マイノリティは国家の権力構造から排除され、なおかつその支配体制のもとに置かれる状況を示す。インドでは、インド人民党政権が発足して以降、ヒンドゥー至上主義者による自警団が組織され、ムスリムとの結婚により改宗したヒンドゥー教出身の女性を連れ戻してヒ

ンドゥー教徒の男性と結婚させたり、ヒンドゥー教で神聖とされる牛の肉を解体販売しているとして、イスラム教の屠殺業者を襲撃し殺害するなどの行為が報告されている。ジェフレロットは、自警団による誘拐や殺人という犯罪行為が、刑事裁判では「親族の名誉」や「牛の保護」を理由に正当化され、マジョリティを占めるヒンドゥーの正統性(legitimacy)のもとに犯罪者が擁護されているとして、エスニック・デモクラシーへと傾倒するインドの現状に警鐘を鳴らした。

以上の二つの基調講演は、急速なグローバル化の状況とナショナリズムを対比させつつ、現代のインド社会における重要な課題を提示したと言える。だが、国家や宗教のイデオロギーを包摂するポリティカルな議論において見落とされがちなのは、高次レベルに落としこまれる複数性や多様性である。人類学に役割があるとすれば、さまざまなレベルにおいて種々のアクターが錯綜しながらイデオロギーと交渉する諸相を丁寧に描くことによって、複層的かつ精緻な議論を展開することではないだろうか。

文・写真 菅野美佐子

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／南アジア地域研究国立民族学博物館拠点研究員。専門は文化人類学、ジェンダー研究。著書に『現代インド5—周縁からの声』(共著 東京大学出版会 2015年)、『インド ジェンダー研究ハンドブック』(共著 東京外国語大学出版会 2018年)などがある。